



院内感染対策だより

第6号
H22.1.18

新型インフルエンザが流行しています。今回は診断と予防接種を取り上げました

インフルエンザ診断迅速キット



◆ 検体採取のタイミング

発症後 12 時間以内は、検出率はかなり低く、24 時間以降は高くなる。インフルエンザウィルスの増殖は、発病後 2~3 日で最高に達し、その後急速に減少し、5~7 日で消失します。迅速診断キットで陽性になるには、インフルエンザウィルス量がある程度必要です。ウィルス量の少ない発病の初期は陰性になりやすくなります。つまり発症からの期間が短いとウィルス量が少なく、検出率が下がります。

◆ 検体採集

検査検体としては、主に鼻腔ぬぐい液を使用
咽頭ぬぐい液を用いる場合もありますが、
鼻腔ぬぐい液のほうが、咽頭ぬぐい液よりも
検出率が高いといわれています。採取方法は、
スワブを鼻腔にしっかり挿入し、鼻甲骨を数回
こするようにして粘膜表皮を採取します。
鼻腔が乾燥している場合は予め、スワブを
滅菌済みの生理食塩水で湿らせてから採取する
ことをお勧めします。

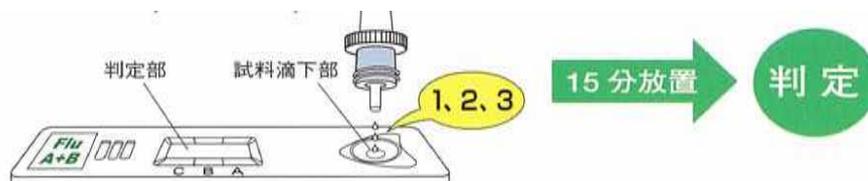
鼻腔ぬぐい液 の採取方法

スワブを鼻腔にしっかり挿入し、鼻甲骨を数回こするようにして粘膜表皮を採取します。



◆ 検査所要時間

迅速キットの判定には、15 分の時間を要す（前処理の時間を含めて 20 分程）



◆ 検査結果の解釈

迅速診断キット（簡易検査）では、A 型と B 型のみ検出可能
新型インフルエンザは A 型ですが、この検査だけで新型と診断されるものではありません。インフルエンザウィルスは、内部蛋白質の抗原性の違いにより、A 型、B 型および C 型に分類されます。ヒトで典型的な症状を引き起こすのは A 型と B 型ウィルスで、C 型ウィルスによる症状は軽度です。PCR 検査（遺伝子診断）で H1N1 と確定されなければなりません。あくまで新型であろうという推測に過ぎません。PCR 検査もまた鼻腔ぬぐい液（専用容器必要）を用いて実施されます

ワクチン接種



◆ 種類

ワクチンには大きく 2 つの種類に分類

・生ワクチン

病原体を弱めたウイルスや細菌などを接種して感染を起こさせるもの

・不活化ワクチン

大量に培養されたウイルスや細菌などのウイルス粒子や細菌の菌体などを集めて精製したのち、ホルマリン等の薬剤を用いて処理し、病原体の活力を失わせて不活化したもの

◆ 接種間隔



◆ インフルエンザワクチン効果の持続期間

ワクチンの予防効果が期待できるのは

接種後 2 週から 5 カ月程度と考えられている



◆ 肺炎球菌ワクチン

高齢者の市中肺炎で最も多い起炎菌である肺炎球菌に有効なワクチン

肺炎球菌以外の病原体による肺炎には効果がないので、すべての肺炎を予防できるわけではありません。接種すると 5 年で抗体価がピーク時の 8 割に低下しますが、短時間で再接種を行うと、接種した部位での強い副反応が増加するほか、肺炎球菌ワクチンでは再接種による「ブースター効果」もみられないことから、日本では再接種は認可されていません。